

囚われた少女広美

祈りの牢獄



原作 カルシファー

イラスト シャルル

声優 えがなぐ

制作協力 このさきれむ

牢内での待遇も大人の死刑囚と変わらない、過酷なものだった。逃走と自死防止のため、手足を鎖で縛られ、拷問による取り調べの時間以外はずっと吊り下げられたまま、身動きすることもできない状態だった。

体重がかかって引き伸ばされた手足が、骨が外れそうに痛む。

子供の広美は鎖の高さに背が合っておらず、爪先立ちのままとなってしまう。宙に浮いたかかとはプルプルと痙攣していた。枷の食い込む手首は血が滲んで痛々しい。この状態では、痛みでまともに眠ることもできずにいた。

食事や水は僅かしか与えられない一方、トイレは無く垂れ流しの状態だった。石壁に広美のうめき声と嗚咽、鎖の鳴る音が果てし無く響いていた。

ガチャ…

うう…
痛い…

痛いよお…



苦しみ喘ぐ広美には、捕まった心当たりが一つだけあった。

少女は、絵本に出てくる囚われの娘に密かに憧れていたのだ。魔王に誘拐され、勇者に助け出されるヒロイン。あるいは生贄として自ら怪物への生贄となるお姫様。

そうした娘たちに自分を重ね、密かに股間を熱くしていた…。

これは、悪い事を妄想してしまった神様からの罰なのかもしれない…。少女はそんな風に考えていた。



神様…これは罰なのでしょうか…



「カツン、カツン…。」

白濁とした広美の意識が急に冴えた。独房の外に男の足音が聞こえてきたのだ。ガチャガチャと扉の鍵を開ける音。

ぐったりと吊られていた広美はゆっくり顔を上げ、不安げな表情で鉄格子の嵌る扉の方を眺めた。


外は暗く、向こう側は見る事ができなかったが、それがますます広美の不安を掻き立てていた。



やがてガタンという音とともに錆びた鉄扉が開く。
扉の向こうの暗闇から、不気味な黒装束を身に纏った看守たちが入ってくる。
恐ろしげな鞭などを見せつけるように手にした男達は
「魔女、ゆっくり休めたか？」と半ば煽るように声をかけてきた。


(い…嫌ッ！)





「こんな酷い牢で：休めるはずが、ありません…
それにわたし、魔女なんかじゃありません！
この鎖を解いて、早く釈放して下さい！」

やや疲れた表情の広美は、それでもしつかりとした声で看守たちに無実を訴えた。魔女であることを認めたら何が起こるか、広美も既に知っていたのだ。



「ビシッ！ バシイッ！」
鞭が強く少女の小さな体に振り下ろされ、
肌の露出する腕や太ももに赤い筋を作ってゆく…
広美は確かに囚われの身に憧れていたが、
男の力で振り下ろされる鞭の、まるで肌を切るような痛みは
想像を遥かに超えるものだった。

広美は声にもならない悲鳴を上げ、涙を流しながら
(神様ごめんなさい…！ 悪い事を妄想していたわたしを
許してください…！)と心の中で祈っていた。

数十回の鞭が飛び、広美はついにぐったりと反応しなくなった。

気を失ってしまったのだろう。

看守たちは小さな鍵を取り出すと広美を吊るしていた鎖を外した。

鉄枷がパカッと開くと、枷が食い込んで血が滲み、擦れて傷だらけになった手首があらわになった。

2日ぶりに自由になった広美はその場の床に崩れるように倒れ込む。

「う…う…痛い…。」

と微かなうめき声を上げながら石畳の床に倒れ込む少女。

しかし許して貰えたわけでも、開放して貰えたわけでもない。

これは広美に対する更なる責め苦のはじまりでしか無かった。





やがて平手打ちで起こされた少女はゆっくりと立ち上がる。そのまま、命令されたわけでもなく、自ら両腕を後ろ手に差し出す。長期の牢獄生活を経て広美は次に自分の身に何が起こるか理解していた。看守たちは拘束具を取り出すと少女の手足にそれを嵌め、念入りに鍵をかけた。何キロも重さのある枷は、かけられただけでひどく痛む。この有様では、歩くこともままならないだろう。先程の鞭はまだ序章に過ぎず、これから魔女罪の本格的な取り調べが始まるのだ…。

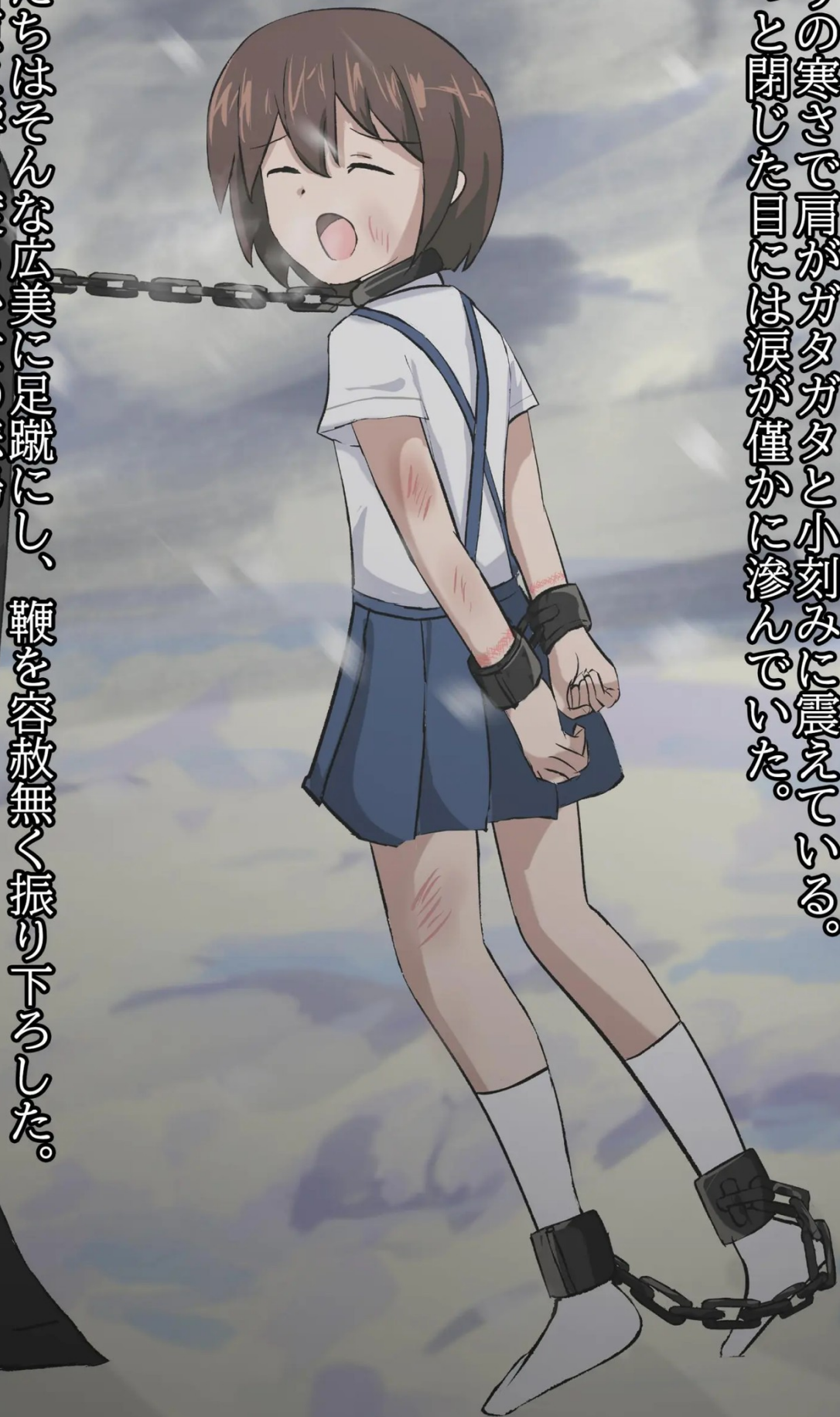
「ハアハア… うう…う… 寒い…、寒い…。」
雪の野外、広美は見るも無惨なやり方で拷問塔まで連行されていた。
独房のある牢にも尋問設備はあったが、魔女には特に警戒が必要として
聖なる場所との迷信のある塔が拷問場として使用された。
このため、尋問の度にこのような過酷な連行が行われていた。
首に食い込む鉄首輪をの鎖を強く引かれ、少女は
ぐっ！かはっ！と苦しげなうめき声を上げた。



雪まじりの風が吹雪く中、広美には羽織るものも一切与えて貰えなかった。
生地が薄い半袖の制服姿のまま連行され、細い手足はピンク色の鳥肌で覆われて
ガタガタと小刻みに震えていた。
いつもの独房も冷え込みは辛かったが、この吹雪の野外の寒さはその比でなく、
広美は白い息を吐きながら、耐えるように手を強く握りしめながら歩いていた。

「ぐツ…!! かはツ！」

再び首輪を強く引かれ、足が雪と鎖に取られた広美はその場に倒れ込む。ハアハアと息も絶え絶え、生地の薄い制服は雪まみれになり、あまりの寒さで肩がガタガタと小刻みに震えている。ぎゅっと閉じた目には涙が僅かに滲んでいた。




看守たちはそんな広美に足蹴にし、鞭を容赦無く振り下ろした。

白い雪原に響き渡る少女の悲鳴…

やがて歩くのも難しくなった広美は、半ば引き摺られるようにして

拷問塔に辿り着いたのだった。

A dark, atmospheric photograph of a stone building, possibly a tower or a small house, partially obscured by trees. The building has a window with a decorative pattern. The scene is dimly lit, creating a somber and mysterious mood.

「ぎやあああッ！ アーッ！」
暫くすると、拷問塔の中から
少女の悲鳴が響きはじめた：

「あッ！ ああッ！ アッ！ 痛いッー！」
悲鳴を上げ、顔をしかめて苦しむ広美。
彼女は、鋭角に尖った三角木馬に乗せられていた。
残酷な拷問器具であり、本来子供にに使われるようなものではない。
下着は履いておらず、股間にじかに金属の角がじかに当たり
幼い性器に直接突き立っていた。
股間から脳天まで突き上げてくるような、激しい痛み。
身を振って鋭角から逃げようにも厳しく拘束されており、
縄と鎖が軋む音を立てるだけだった。





「キヤア熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！」
広美の胸には蝋燭までかけられ始め、少女は
あまりの熱さに悶絶する。
「寒いというから暖めてやってるんだぞ。
どうだ、魔女であることを認めるか？」
と尋問されるも、目を閉じ歯を食いしばり、
ぶんぶんとかぶりを振る。体を動かしたため、
少女のクりに鋭角が突き立ち、「ツツ！！」と
声にもならない悲鳴を上げて悶絶する。
木馬に乗せられて既に数時間。
角が食い込む股間は既に感覚を失いかけていた。

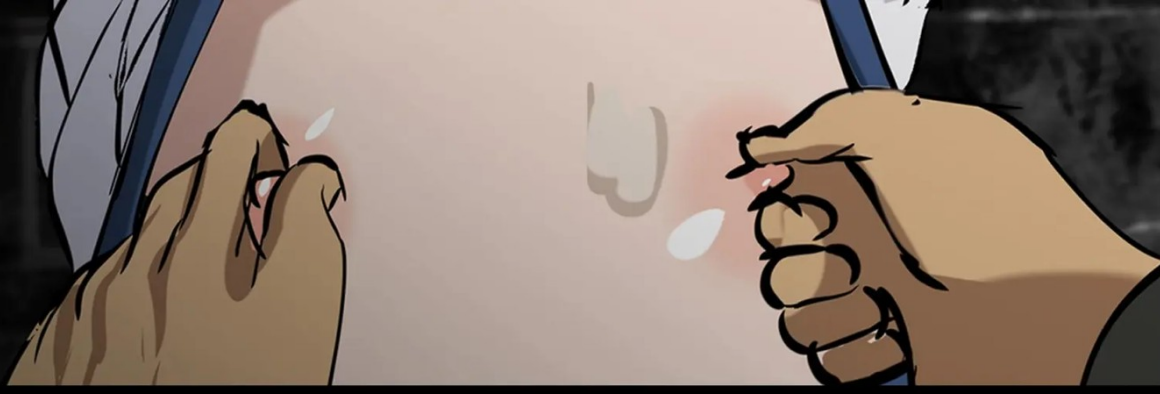


ギリ… ギリ…



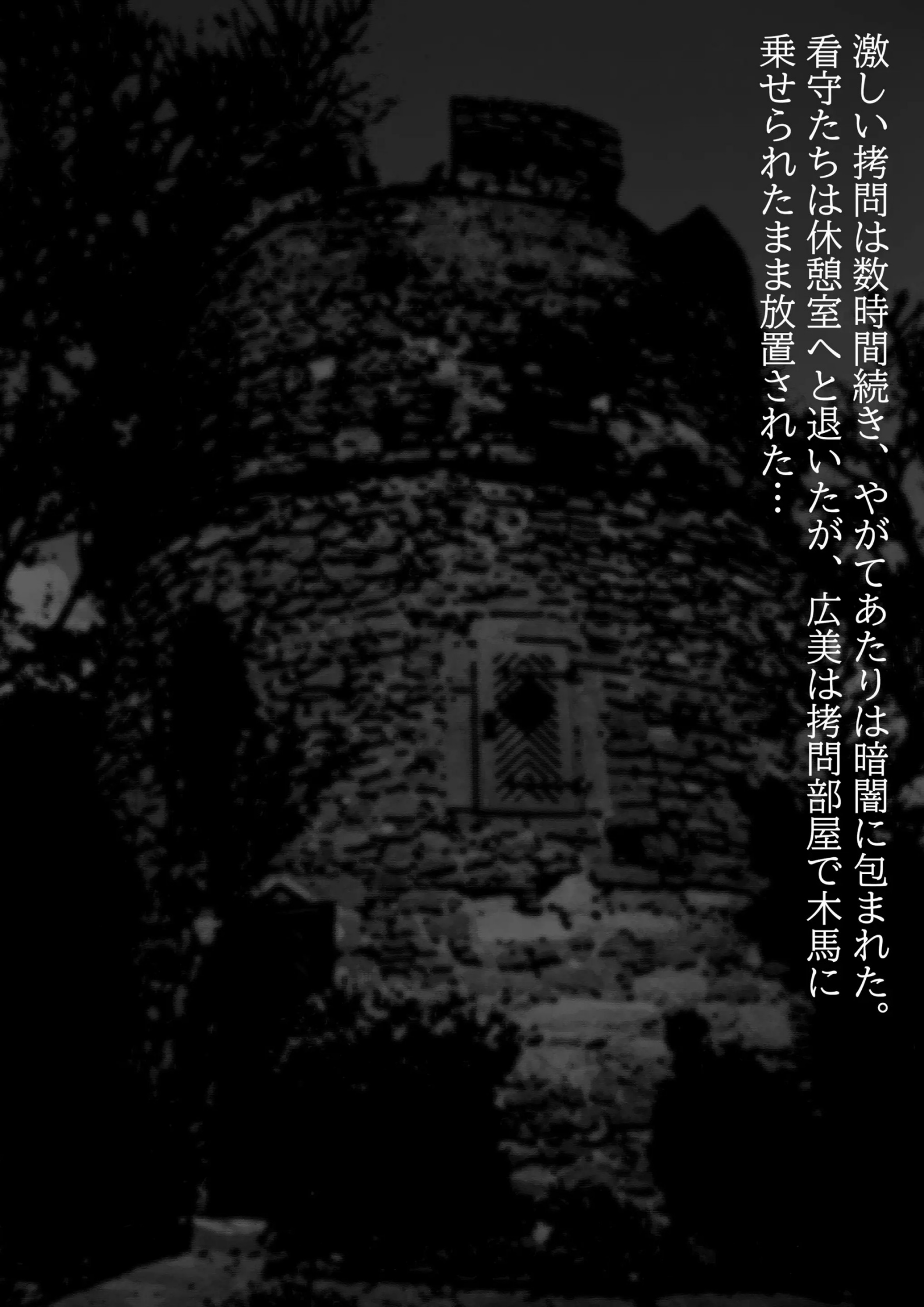
ああ…!

凄まじい拷問が続くなか、看守の一人が少女の乳首がピンと天に向かって屹立しているのを見つけた。
「娘! なんだこの乳首は… 勃っているではないか… 淫乱な魔女め!」
看守はそういうと、乱暴に広美の立った乳首を強く掴み、乱暴にねじり回す。
「ぎゃあああッ! あんツ! ちが… 違います…! はあんっ!」



イクッ…!

「何が違うんだこの売女が！ まだ子供のくせに昂奮しやがって！」
看守は爪を立てるほど強く広美の乳首をつねり、ギリギリと捻り回し、
最後に引っ張ってビシツという音とともに乳首と指が離れた。
「あああああッ あんツ！ イクツッ！ イっっちゃう…！」 少女はそう叫ぶと、
白目を剥き、木馬が食い込む股間からブシユツと汚い液を流して気を失った。



激しい拷問は数時間続き、やがてあたりは暗闇に包まれた。
看守たちは休憩室へと退いたが、広美は拷問部屋で木馬に
乗せられたまま放置された…



「くツ： あッ：」 ギンギンと木馬が軋む音とともに、広美の押し殺したようなうめき声が響く。少女の腰は小刻みに前後に揺すられ、まるで木馬に自らの股間を擦り付けるように動いていた。

「くツ、あッ：」 ソンツッ！」少女の発する甘い声。マゾに堕ちた広美は、あろうことか三角木馬に擦りつけて、オナニーをしていたのだ。

広美は器用にも、太ももで木馬を抑え、彼女にとって「イタ気持ちいい」頃合いの食い込み度合いになるよう、調整をしているようだった。

「んっ！ アツ！ あきやえああアアアツー！」
刹那、広美が体重を支えていた太ももが愛液で滑り、少女の股間が鋭角に強く突き立った。さすがに、本気で痛かったのだろう。声にならない悲鳴を上げ、ぶんぶんとかむぶりを振りながら悶絶する広美。
秘部からはブシュツブシュツと汚い液体が吹き出ており、悶絶しながらも少女は明らかに激しく昂奮しているようだった。



「んッ！ 拷問： いい：」
暫くすると激痛は引いたのか、また股間をゆっくりと擦りはじめる。
もちろん、木馬の背は股間に突き立ったままであり、普通であればそれだけでも耐え難い痛みだ。広美がマゾに目覚めていなければ、
この上で過ごす一晩は耐え難いほどの苦しみになっていただろう：
広美の木馬の上での背徳的なオナニーは、何度も気を失いながらも、
夜がふけるまで数時間に渡って続いていた。



翌朝。

広美は木馬に跨ったまま白目を剥いて失神している姿で発見された。鋭角の背は愛液とも尿とも分からない液で濡れており、少女は完頂したまま気を失ったのだろう。

看守たちは18時間ぶりに広美を降ろすと、独房のある牢獄まで気を失ったまま連れ戻してゆく。

こんな状態でも手枷・足枷で拘束され、温かい衣服も与えられず半ば気を失ったまま引き摺られていた。

独房に戻され、拘束具を外された広美はぐったりと倒れ込んだ。
やがて辛そうに体を上げると、手ぐしで乱れた髪を整える。
こんな状況の中でも、広美は女の子の心を忘れていないのだろう。

手が唯一自由になるこの瞬間は、
ずっと手錠をされていた今の広美にとって
髪を整えられる貴重な時間だった。

一通り髪を整えると、すっと立ち上がり
壁の手枷の前で両手を上に掲げる。

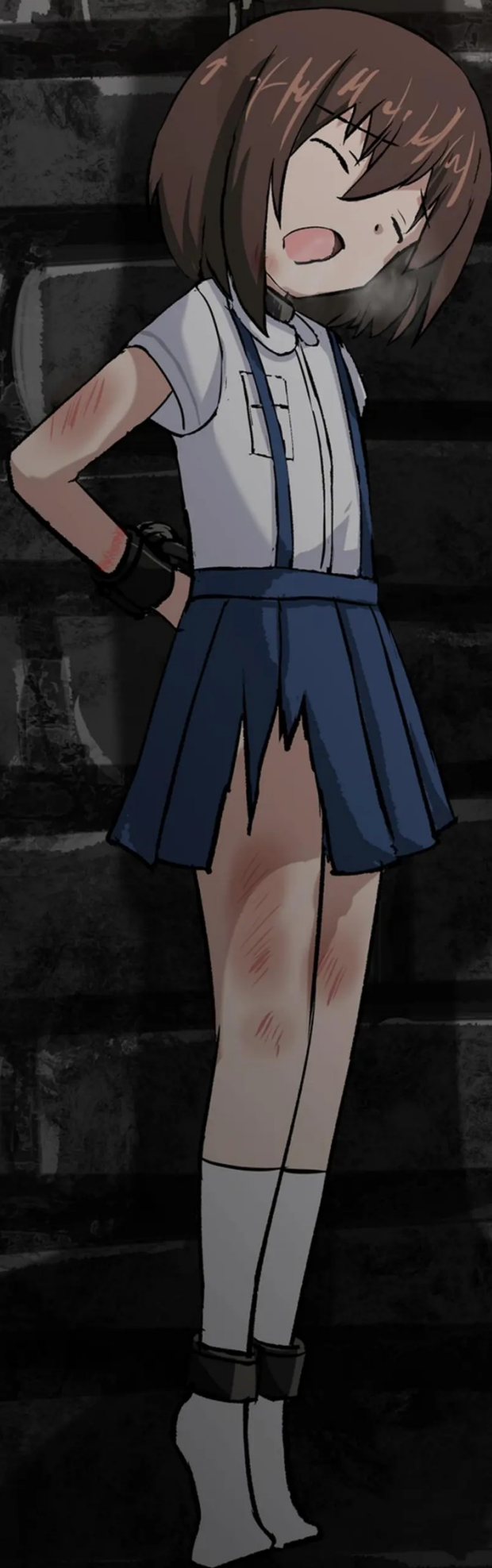
いつものように吊られるものだと思つてのことだが
看守たちは壁の手枷は使わず、何やら首輪の準備をし始めた。



「ぐふッ！ かはッ…！」

広美は世にも恐ろしい方法で、天井から拘束された。

看守は連行に使う鉄首輪を嵌めた上、足先がかろうじて届くような高さで広美を吊るし、固定してしまった。両手も後ろ手で縛られており、広美は首輪を食い込ませた苦しい姿勢で、次の審問まで数日を過ごす事になる。



「…くる… くるし…い…」

首が擦れ、息もできないほどの苦しみ。しかし縄での絞首と異なり首が締めきりきることはなく、広美の苦しみはずっと続くのである。

全身をプルプルと震わせ、手足には脂汗が滲んでいた。

やがて広美はあまりの苦痛に意識をうしなつた。
おそらく、苦痛から暫くすればまた目を覚まして、苦しみもがく声が
牢内に響き始めるのだろう…
終わりのない苦しみに、少女は心の中で祈っていた。
「神様…ごめんなさい… はしたない私を許して下さい…」と。



しかし、これほどの拷問を受けながらも、股間は再び熱を持っていた。
長期の牢獄生活と拷問で、広美は既に一線を超えたマゾに目覚めていた。
おそらく、少女はこの先もずっと深い闇に堕ちていくのだろう。
神様の広美に対する罰は、いつまでも果てしなく続いた。